

<国連からのメッセージ>

核兵器をなくそう

「核兵器が人類にもたらしている脅威に対し、私たちは核兵器の完全廃絶に向けて新たに断固とした行動をとらなければならない。私たちには、核戦争を生き延びた被爆者と地球に対して、この行動をとる義務がある」 国連事務総長 アントニオ・グテーレス

広島と長崎への原爆投下は、数万人の死者と想像を絶する人的被害をもたらしました。広島と長崎の惨状は、人類の生存のために核兵器を二度と使ってはならないことを明らかにしました。しかし、世界には現在もこの世界を何度破壊しても余りある約1万4,000発の核兵器があります。

世界は、1945年8月の原爆投下を生き延びた被爆者が勇気と道義的リーダーシップをもって、核の脅威に対する普遍的な闘いをつづけてきたことに感謝しています。国連は、被爆者の証言が次世代に確実に受け継がれるように尽力しています。被爆者は、核兵器が現存する脅威であり、その使用に対する唯一の保証は核兵器の完全廃絶であることを思い起こさせる存在です。核兵器廃絶の目標は、1946年に開かれた国連総会で採択された第1号決議以来、国連の軍縮に関する最優先事項であり続けています。

第10回核兵器不拡散条約再検討会議が開かれるのを前にして、世界の指導者たちに対し、立場の違いを脇に置き、核兵器廃絶という共通の目標の達成に向けて大胆な措置を講ずることによって被爆者の勇気に応えるよう強く求めます。

「ヒロシマ・ナガサキから 75 年

ヒバクシャ―核兵器廃絶に取り組む勇気ある人々」

1945年8月のあの日の体験から、私たち被爆者は、核兵器のない世界、戦争のない世界を願い活動してきました。

被爆の身体的・精神的影響に耐えながらこの目標に向かって努力したことが、私たちの人生を意味あるものにしました。

この展示は、写真、証言、詩、アートなどを通して私たちの体験を伝えるとともに、国連の協力を得ながら核兵器のない世界の実現に向けて70年以上にわたって活動してきた私たちの取り組みを紹介します。

私たちは、包括的な核兵器禁止の時代を待ち望んでいます。この国際的な動きを後押しするために、あらゆる機会を捉えて、核兵器はいつか本当にすべての国からなくせるといった信念を広めていきたいと考えています。

自分たちが受けた苦しみをほかの誰も体験することがないように、との私たちの願いを皆さんと共有することを望んでいます。

1.

ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ
こどもをかえせ

わたしをかえせ わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ 峠三吉「原爆詩集」序より

写真：広島原子雲（米軍資料）

2. 焼き場に立つ少年

この少年が死んでしまった弟をつれて焼き場にやってきたとき、私は初めて軍隊の影響がこんな幼い子どもにまで及んでいることを知った。アメリカの少年はとてもこんなことはできないだろう。直立不動の姿勢で、何の感情も見せず、涙も流さなかった。そばに行つてなぐさめてやりたいと思ったが、それもできなかった。もし私がそうすれば、彼の苦痛と悲しみを必死でこらえている力をくずしてしまうだろう。私はなすすべもなく、立ちつくしていた。

ジョゼフ・オダネル（“Japan 1945”より）

オダネル氏は、米海兵隊所属のカメラマンで、1945年9月にこの写真を撮影しました。写真に写っている少年を探しに1980年代に日本を訪れましたが、探し出すことはできませんでした。

I 破壊と殺りく

3. 広島 原爆投下前・投下後

1945年8月6日午前8時15分、原子爆弾が広島に投下されました。炸裂した原爆は放射線（中性子線とガンマー線）と衝撃波と熱線を放出しました。爆心地から2km以内のすべてのものを殺傷し、破壊し尽くしました。その日の内に4万5千人が殺され、その後毎日、放射線と怪我がもとの死がつづきました。1945年12月末までに14万人以上の人々が亡くなり、さらに数万人の人が後遺症に苦しみました。

写真：1938年広島県産業奨励館と中島町 撮影：松本若次 大内齊氏提供

1945.10.5 原爆ドームと焼け野原 撮影：林重男 広島平和記念資料館提供

4. 長崎

広島への投下から3日後、1945年8月9日午前11時2分、2発目の原子爆弾が、長崎に投下されました。この爆弾はプルトニウム爆弾で広島に投下されたウラニウム爆弾より強力な爆弾でした。しかし、爆発地点は長崎市の中心地から3km離れたため、死者の数は広島より少ない数でした。広島と同様、死傷者の正確な数は誰にも分かりません。その年の暮れまでに少なくとも7万人もの人々の尊い生命が奪われました。

写真：被爆前の浦上天主堂と山里町界限 米軍返還資料 長崎原爆資料館提供

天主堂の廃墟と焦土 米軍返還資料 長崎原爆資料館提供

5. 御幸橋

御幸橋に引き返した。

カメラのシャッターが切れない。

「助けて」「水をください」と

哀願するかすかな声。

動く気力もない母親の胸にすがる幼児。

小さい子どもを抱きかかえ

「目を開けて、目を開けて」

と子どもの名前を呼び続ける半狂乱の母親。

まさに地獄だ。

頬に涙が流れファインダーを透す情景がうるんでいた。

松重美人（「涙で曇るファインダー」より）

写真：爆心地から 2.2 km の御幸橋西詰（8 月 6 日）撮影：松重美人 中国新聞提供

6. あの日の長崎

原爆の惨（さん）は、全面火傷、腐敗した傷の人びと、それらの群れである。

それらの群れが地に充ち、川を埋めた。頭髪をばらばらにふりみだし、火傷して裸で、黒く、あるいは白く膨れたのが、路上にも、岡の斜面にもむらがりながら、のろのろと動いていた。

秋月辰一郎（医師・長崎被爆者）

写真：左 爆心地から南南東 1.2 km。現地本部からおにぎりの配給を受けて帰る母と子。
すぐ口にする元気もない。1945 年 8 月 10 日朝、長崎市井樋の口付近

中 泣く元気もない乳飲み子、医師を探す父親。爆心地から 1.5 km、1945 年 8 月 10
日朝、長崎市井樋の口付近

右 浦上駅プラットホームで死んでいた母子。爆心地から南 1 km、1945 年 8 月 10 日
昼頃、長崎市岩川町

3 枚とも撮影：山端庸介 山端祥吾氏提供

7. 原爆の脅威

原子爆弾は爆発の瞬間、放射線（15%）と熱線（35%）と爆風（50%）を放出した。

放射線は中性子とガンマー線からなり爆心地から 500 メートル地点ではそれぞれ 604 ラド、3,500 ラドで致死率 100%であった。低線量の放射線は後遺症を引き起こす原因になった。

熱線は 3.5 キロメートルの位置で 1.8 カロリー／平方センチメートル。野外にいた人の露出部は 1～4 度のやけどを負った。

爆風は 3.2 キロメートルの地点で 28 メートル／秒で、爆心地には 280 メートル／秒。1.5 キロ以内の木造家屋はすべて倒壊した。

熱線、爆風、放射線の強さと爆心からの距離の関係図 3 枚

写真：放射線による脱毛

火傷の被害者。この写真は皮膚移植後に撮影された。

爆風で倒れた家。爆心地から 3 km、広島市段原町。

3 枚とも日本映画社フィルム「広島・長崎における原子爆弾の影響」より

8. 死の同心円 広島・長崎

原爆による熱線は、人びとを焼き殺し、火傷を負わせました。燃え広がった火は、街を総なめにしました。

爆風で、地面や壁にたたきつけられて多くの人が無残な死をとげました。爆風は 60km にまで達し、家屋の損壊は 5km までおよびました。

爆心地から 1.5km 内の木造家屋は一瞬で倒壊し、家の中にいた人びとは押しつぶされ、火災で生きのまま焼き殺されました。

原爆の放射線は、近距離で被爆した人びとに急性原爆症を引き起こしました。放射能の影響

は、家族さがしや救援のために広島、長崎市内に入った人びと、被爆した人の看護にあたった人たちにも及びました。

広島の子者のデータ

爆心からの距離	0.5 km 以内	0.5～1.0km	1.0～1.5km	1.5～2.0km	2.0～3.0km
死亡率	96.5%	83.0%	51.6%	21.9%	7.6%

原爆投下時の広島市の人口：31 ～ 32 万人

1945 年 12 月 31 日までの死者：約 14 万人±1 万人

長崎の子者のデータ

爆心からの距離	1.0 km 以内	1.0～1.5km	1.5～2.0km	2.0～3.0km
死亡率	88.4%	51.5%	28.4%	8.5%

原爆投下時の長崎市の人口：27 ～ 28 万人

1945 年 12 月 31 日までの死者：約 7 万人±1 万人

(死者のデータは庄野直美・飯島宗一『核放射線と原爆症』=日本放送出版協会から)

写真：左 広島上空

右 長崎上空

9. もしニューヨークに落ちたら

ニューヨークに1メガトン級の核爆弾が落とされたとしたら？ 爆心地から半径 2.5km (1.5 マイル) の地域内の建物は堅固につくられたものも含め完全に破壊され、そこに住む市民は 100%近くが死亡すると考えられます。そして半径 15～20km (9～12 マイル) の地域内の建物も損壊を被り、住民の大半が負傷し、ニューヨーク市民のほとんどが本人を含めその子孫まで放射線後遺障害に苦しめられる日々が長く続くこととなります。

背景写真：ニューヨーク市 撮影：サム・ヴァラディ

10. 混乱の中の手当て

赤むくれの肌の下にワカメのように皮膚をたらし、手を前に出しあらぬ方向を見たままふらふらと歩く姿はまるで幽霊のようだった。

とつぜん、何かにつまずくとばたりと倒れ二度と起き上がろうとはしなかった。

「原爆と人間展」(1997) より

写真：上 治療にあたる医師も負傷している。広島赤十字病院、1945 年 8 月 10 日。

撮影：宮武甫 朝日新聞提供

左下 収容しきれない患者は屋外の日陰に寝かされて治療を待った。広島赤十字病院、1945 年 8 月 10 日。撮影：宮武甫 朝日新聞提供

右下 大村海軍病院に運ばれた少女。全身ぼろぼろに皮膚が垂れ下がっている。8 月 11、12 日頃、長崎。撮影：塩月正雄 長崎原爆資料館提供

11. 亡くなった人たち

「14歳の長男を5日間探しましたが、見つからず、港で死体を船に積んでいると聞き、そこで見つけた。中学校までやっと運んで、そこで荼毘に付す。

5日間、冷たいコンクリートの上に寝かされ、水一滴やる人もなく死んでいったと思えば、胸ははりさけそうにくやしい。自分の産んだ子を、母のその手で荼毘に付すとはなんとむごいことか」（広島被爆者）

写真：上 広島の爆心地から東800m、市の目抜き通りにあった福屋百貨店の横は、急ごしらえの焼却場になり、つぎつぎと兵士や市民の死体が担架で運ばれ、焼かれていった。8月12日 撮影：宮武甫 朝日新聞社提供

下 被爆から7年たった1952年7月、原爆犠牲者の遺骨が次々に発見された。写真は坂町の遺骨。野ざらしのもの60体、埋葬されていたもの156体。被爆当時、軍の臨時救護所があり、収容された被爆者が次々に命を失った。中国新聞提供

12. 母の声を背に

「一瞬にして倒壊した家屋。くずれた屋根瓦、屋根板、土壁。建物の中のわずかな空間に上向きに倒れている母を見つけた。顔中血だらけで横を向くこともできず『肩のあたりをおさえつける物をのけて—』という母の声が聞こえた。だが、どうにもできない。火が回ってきた。最後の別れの言葉をかわして私は逃げた。般若心経を唱える母の声に後髪をひかれながら—」 岩佐幹三（広島被爆者）

写真 上 長崎 8月10日昼頃 撮影：山端庸介 山端祥吾氏提供

下 広島爆心地から1.36km 撮影：宮武甫 朝日新聞社提供

II ヒバクシャの生と死

13. 急性症状

広島、長崎の原爆投下から数十万の人々が生き延びたものの、放射線による被害を受けました。被爆後の急性症状には、脱毛、下痢、出血（歯茎、鼻、目尻）、皮下出血、嘔吐、化膿などがあります。

写真 上 爆心地から1kmで被爆した7歳の少年と、南西2km付近の木造家屋内で被爆した11歳の少女。頭髪の脱毛。広島、10月6日。

左下 歯ぐきからの出血

右下 紫斑（広島）—兵士21歳。第104部隊（東北1km）の木造家屋内で被爆。8月下旬、歯茎から出血、顔と上半身に現れ始めた紫色の皮下出血斑が溢出斑となり、9月3日撮影2時間後に死亡した。

3枚とも日本映画社フィルム「広島・長崎における原子爆弾の影響」より

14. 染色体異常、遺伝子破壊

原爆が放出した中性子線とガンマ線は細胞そのもの、造血機能を破壊し、急性症状を発症させ、多くの被爆者を死に至らしめた。原爆放射線による後遺症の原因は、染色体を構成するDNAの放射線による破壊に起因する。放射線が通過した細胞分子の電離によって発生した酸素がDNAの遺伝情報を破壊する。多くは修復されるが修復されない幹細胞は潜伏期をへて異常増殖を始め、がん細胞となる。

図：染色体を構成する DNA と放射線の破壊を示す。

グラフ：100cGy 以上の高線量の被爆群での末梢血中造血幹細胞における放射線誘発性染色体異常の頻度を示す。検索した幹細胞総数に対する異常核型保有細胞の頻度を被曝線量別に示した。線量の増加に比例してその割合も上昇している。

写真：破壊後の修復に異常をきたした染色体群

高線量被曝例で観察された末梢血中幹細胞の染色体異常核型 (a) と末梢血 T リンパ球の異常核型 (b)。いずれもきわめて類似の核型異常 (染色体 46 本、XY 性染色体、C 群染色体の短腕欠失および過長) を示す。このことは放射線障害が全能性造血幹細胞レベルに及んだことを示唆する。

15. 被爆後の疾病

急性症状を克服した被爆者の中から、5 年ほどして白血病が急増していった。被爆後 10 年にそのピークを迎え、その後減少した。かわって各種がんが発症し、それぞれ増加した。それぞれの固形がんの増加が認められる被爆後年数は次のとおりである。甲状腺がんは 10 年、乳がん、肺がんは 20 年、胃がん結腸癌、骨髄腫は 30 年。発症率は被爆時年齢が低いほど高い。被爆後 50 年を経て高齢化した被爆者に骨髄異形成症候群が多発はじめ、年ごとに増加している。被爆時の遺伝子破壊が緩慢に変化し発症に及んだ。白血病の第二次猖獗期 (しょうけつき) といえる。

グラフ：白血病や各種固形がんの死亡率と骨髄異形成症候群の発症率を原爆投下からの年数との関係で示したグラフ。データは朝長正男医学博士による (2013 年 3 月ノルウェー・オスロ)

顕微鏡写真：長崎原爆の医学的影響－白血病に関して

(左から) 正常な骨髄、顆粒球、赤芽球

急性リンパ性白血病 (ALL)：小細胞の著しい増殖が認められる

急性骨髄性白血病 (AML)：大型骨髄芽球の著しい増殖が認められる。

慢性骨髄性白血病 (CML)：成熟段階にある様々な顆粒球の著しい増殖が認められる。

16. 原爆小頭症

1946 年に生まれた畠中百合子さんは、お母さんのおなかの中で被爆し生まれながらに障害がある「原爆小頭症」です。母親の胎内で妊娠初期に被爆し、大量の原爆放射線を浴びたことで知能や身体に障害をもって生まれました。

理容院をしていた両親に暖かく育まれ、成人してからは父親と一緒に原爆被害の実相を訴えました。「この子の行く先を思うと…」と母親は声を詰まらせ、親の負担能力をはるかに超えた厳しい現実が立ちはだかります。

写真：上 両親の経営する理容室の前で (1974)

下 新聞を見つめる百合子さん (1974) 撮影：2 枚とも福島菊次郎 共同通信提供

17. 佐々木禎子 広島被爆 (1943-1955)

サダコさんは 2 歳の時、爆心地から 1.6 キロの地点で被爆しましたが奇跡的に無傷で助かりました。運動能力抜群で、リレーの時も男の子をスイッと抜いていたずらっぽく笑うサダコさんは学校でも人気者でした。

被爆から 10 年経った、小学校卒業を目前にして被爆による白血病と診断され、緊急入院しました。「紙の鶴を 1000 羽折ると病気が治る」という伝説を信じ、鶴を折り続けましたが、サ

ダコさんの願いは天に届きませんでした。発病から半年後に亡くなり、少女の人生は12年で終わってしまいました。

クラスメイトたちは、彼女の死が無駄にならないことを願って、募金運動に立ち上がりました。日本中の子どもたちの協力で、広島平和記念公園に「原爆の子の像」がつくられました。今は国の内外から訪れる人々によって「平和を願う折り鶴」がたくさん献納されています。

写真：左上 入院した病院のまえで 佐々木雅弘氏提供

左下 広島平和記念公園に飾られている折り鶴

右 原爆の子の像 広島平和記念資料館提供

18. こころの傷

あの日、火をかいくぐって家に帰った。

家は焼け、四人の子どもはいなかった。

骨がさらっとくだけた。

妻は放心状態になってしまった・

三か月後、姪が娘からもらっていた市松人形を娘の代わりにと、返してくれた。

妻はそれを抱いて喜んだ。

それから毎年、一体ずつ市松人形を集めてきた。

子どもたちへの供養だった。 蔵満良雄・モタエ

写真：上 二人が集めた市松人形

下 市松人形を抱くモタエさんと良雄さん 撮影：2枚とも田沼洋一

19. 発禁・検閲

占領下、アメリカ当局による検閲が広く行われ、原爆投下およびその後遺に関する情報が制限された。核兵器が初めて使われたため、長期的影響について正確に知るものはだれもいなかった。1945年当時、アメリカ当局による安心させるような発表は、不十分な情報に基づいていたため、誤解を招くことが判明した。がんにかかる危険性の高まりなどはおそらく理解されなかった。

情報の一部は公表されなかった。原爆に関する多くの情報は軍事機密とされ、日本の報道機関や出版物は、検閲の対象になった。

2 発の原爆による健康への影響を調査するため、トルーマン大統領によって原爆傷害調査委員会（ABCC）がつくられたが、その報告は1947年になって初めて公表された。調査の詳細が出されたのは、それから数年後であった。

写真 上 占領下の検閲を逃れるために1947年に秘密出版された正田篠枝さんの短歌集「さんげ」の表紙と見開きページ。爆心地から1.7キロの広島の自宅での体験を詠んだもの。35歳だった。「検閲は厳しく、違反すれば死刑になると言われました。死刑になってもいいと決意して、家族に止められながらも、やむにやまれぬ気持ちでこの本を出版しました」（正田篠枝）

左下 核兵器について公の場での発言を制限する指針が、海軍高官の間で配布されていた。国立公文書館より。

右下 日本の報道機関によるニュース記事は、米軍の検閲官が検閲しゴム印が押された。米陸軍発行の「戦闘地域における野戦報道検閲の確立と実施」より。

20. 谷口稜暉 長崎被爆（1929-2017）

谷口稜暉（たにぐち・すみてる）さんが、爆心地から2kmのところを熱線に焼かれたのは16

歳の時でした。背中に負った重度の火傷のため、1年9カ月の間うつぶせに臥せったままの闘病を余儀なくされました。あまりの苦しさは何度も「殺してくれ！」と叫びました。ようやく立ち上がることができたときには、前身の胴体の肉は腐敗し、肋骨の間には深い溝ができていました。

「私は奇跡的に生き延びることができましたが、『生きる』とは『苦しみに耐える』ことに他なりません。私たち被爆者は全身に原爆の呪うべき爪跡を抱えたまま、苦しみに耐えています。核兵器は絶滅の兵器、人間と共存できません。私は核兵器が、この世からなくなるのを見届けなければ、安心して死んでいけません」。

写真 左 2010年5月7日、NPT再検討会議のNGOセッションで各国政府代表の前で訴える谷口さん 日本被団協提供

右上 核実験に抗議の座り込みをする谷口さん、1984年長崎。撮影：黒崎晴生

右下 2015年4月26日ニューヨーク、NGOの集会に参加。撮影：エリコ・プラット

21. 山口仙二 長崎被爆（1930-2013）

山口仙二（やまぐち・せんじ）さんは、14歳の時、長崎の爆心地から1.2kmの地点で被爆し、熱線に上半身を激しく焼かれ、40日間意識不明で生死の境をさまよった後、かろうじて死をまぬがれました。山口さんは被爆の急性症状から回復したあとも肝臓疾患、皮膚がん、肺気腫、喘息など様々な病魔に悩まされ、また身体に残るケロイド痕のため職業を転々として苦労を重ねました。山口さんは深く傷ついた身体にむち打って、核兵器も戦争もない世界の実現を訴え続けました。1982年のSSDIIで、日本のNGO要請団を代表して「ノーモア ヒバクシャ」を訴えました。

写真 左 被爆者の訴えを渡す。1990年5月東京。撮影：森下一徹

右上 被爆直後の仙二さん ©平和博物館を創る会

右下 ケロイドにかみそりをあてる 撮影：村里榮

22. 前座良明 広島被爆（1921-2009）

24歳の時、広島で被爆。その年（1945年）の10月に長野県松本に移住し、長野県原水爆災者の会の結成に参加、副会長、会長を歴任しました。61年松本で始めた食堂に「ピカドン」と命名。2009年、88歳で死去。

自作の詩の一節…「俺はたたかうぞ いつまでも／たたかいぬくぞ いつまでも／息子たちや孫たちに／美しい未来と／しあわせな生涯が／きり開かれることをねがって」

座右の銘…「たたかいがにんげんをつくる」「平和は祈るだけでは実現しない」。

晩年の言葉…「私はこわいものはない。もう棺桶の中に入って立っているが、しゃがめない。私は死ぬまでさわぎつづける。手足がきかなくなったら口だけででも跳ねつづける。いよいよ死ねなくなった。やりたいこと、やらなければならないことがつぎからつぎに出てきて、死ぬ余裕がない。若い人たちを戦争に巻き込みたくない、そのためのさいごの砦でなくちゃと思っている」。

写真 左 術後の診察を受ける 1990年頃

右上 「ピカドン」食堂の前で 2009.10月

右下 長野市の市民に語る前座さん 2009年10月11日 3枚とも前座明司氏提供

23. 渡辺千恵子 長崎被爆（1928-1993）

渡辺千恵子（わたなべ・ちえこ）さんは、16歳の夏、学徒報国隊として動員され、三菱電機製作所で働いているとき、原爆にあいました。鉄骨のハリの下敷きになって下半身の自由を

奪われ自暴自棄になりそうになったとき、いつも励まし勇気づけてくれたのは同じ被爆者であつたお母さんでした。

「原爆犠牲者はもうわたしたちだけでたくさんです。世界のみなさま、原水爆を、どうかみんなの力でやめさせてください。そして私たちが『生きていてよかった』といえる日が一日もはやく実現できますようお願いいたします」。(1956年、第二回原水爆禁止世界大会での渡辺千恵子さんの訴えから)

写真：上 原水禁世界大会に参加する千恵子さん。1970年 撮影：福島菊次郎 共同通信提供

下 「長崎を最後の被爆地に」と、繁華街で訴える。1984年 撮影：黒崎晴生

24. 笹森恵子 広島被爆 (1932-)

13歳の女学校1年生で、学徒動員として建物疎開の後片付け中に爆心地から約1.5キロの所で被爆した恵子さんは、顔から上半身にかけて、ひどいやけどを負いました。

十代の終わりを迎えたころ、恵子さんは教会で谷本牧師に出会い、被爆した若い女性のグループの集まりに参加しました。

東京で何度も手術を受け、23歳になったとき、原爆孤児に寄付金を送る「精神養子」運動を立ち上げたジャーナリストのノーマン・カズンズ氏に出会い、他のメンバーとともにアメリカに渡り、手術を受けました。その後、カズンズ氏の養女となり、看護師となって病院に勤務しました。退職後も被爆体験や平和について語り続けています。

写真 上 ノーマン・カズンズ夫妻の絵の前で 撮影：福田恵子

左下 ニューヨークで証言する恵子さん 2015.4.30 共同通信提供

右下 ニューヨークに到着した恵子さん、同行した谷本清牧師とともに。1955.5.9
ゲッティイメージズ提供

25. 坪井直 広島被爆 (1925-2021)

坪井直(つばい・すなお)さんは、爆心地から1.2km付近の路上で通学途中に被爆しました。

「爆風によりたぶん10mは吹き飛ばされ、熱線により顔、両手、背中、腰、両足など、ほとんど全身に火傷を負いました。被爆1週間後に意識不明となり、1カ月以上経てから意識を取り戻しました。助けられたとき以来、医師は3カ月ほど毎日私に“死の宣告”をしたそうです」その後、坪井さんは何度も入退院を繰り返しました。病名は慢性再生不良貧血症、狭心症、大腸ガン等放射線後障害。彼はその病んだ身体を奮い立たせて、人々に核兵器の恐ろしさを語り、核兵器廃絶を訴えつづけました。

写真 上 1945.8.6午前11時頃橋のたもとに座りこむ 撮影：松重美人 中国新聞社提供

左下 2010年NPT再検討会議中に国連で開催した原爆展にて

右下 中学校教師として生徒を引率する 坪井直氏提供

III 核の脅威

26. ウラン鉱と核廃棄物による被害

核兵器や原子力発電はエネルギー源となるウランの大量採掘から始まる。ウラン鉱山の採掘の規制がまだなかったころには、米国、オーストラリア、旧ソ連の鉱山からの核廃棄物は責任をもって処理されませんでした。その後、清掃作業や地下貯蔵に莫大な金額が費やされてきました。アメリカ西部での採掘作業には先住民が従事し、健康への影響が懸念され続けている。

写真 上 アメリカ・ワシントン州コロンビア川流域のさびれた地域にあるハンフォード核実験場。一時は世界最大のプルトニウム生産施設だったが、1987年に活動を停止した。撮影：桃井和馬

左下 ウラン鉱山労働者だった夫を肺がんで亡くしたナバホ族の女性 アリゾナ州レッドロックで 撮影：豊崎博光

右下 ニューメキシコ州のチャーチ・ロック鉱山は、1982年に閉鎖されるまで何百万トンものウラン鉱石を産出した。ウラン鉱石を採掘するための爆薬をしかける穴を掘る作業員。撮影：豊崎博光

27. 実験被害

1996年に包括的核実験禁止条約（CTBT）が採択されるまで、米・露・英・仏・中などで2000回を超える実験が行われました。インド、パキスタン、北朝鮮は、条約に署名せず、複数回実験を重ねました。

1962年以降の実験は、すべて地下実験場で行なわれました。それ以前の大気圏実験による放射線や放射性降下物は、あらゆる生物に重大な影響をあたえ、環境破壊を引き起こしました。

写真 左上 1998年11/12月発行の原子力科学者会報によると、935回の実験がネバダで行なわれ、内828回は地下で行なわれました。写真は地下実験で陥没した穴。米エネルギー省提供

右上 1950年代、大気圏実験で、風下となった周辺で被曝した人々は「風下住民」と呼ばれるようになりました。ユタ州セント・ジョージでは、多くの住民が死の灰にさらされました。この女性は、1959年に息子を白血病で、1983年には夫をがんで失い、残る4人の子どものうち2人も脳腫瘍に冒されました。撮影：豊崎博光

左下 1962年まで行なわれていた大気圏核実験で、太平洋地域の住民は被害を受け続けました。写真はビキニ環礁の核実験で被曝した少年。撮影：米軍

右下 旧ソ連セミパラチンスク実験場 撮影：森住卓

28. 原発事故—チェルノブイリ

爆発事故で原子炉建屋の上部や一部の側面が吹き飛んだチェルノブイリ原発4号機は、コンクリートや鋼材で「石棺」を築き、放射性物質の外部への飛散を防ぎました。

事故から30年が経ったころ石棺が老朽化し、アーチ型のシェルターで4号機を覆う「再石棺」を築きました。

写真 左 がん病棟の少年、1991年5月1日。 撮影：ウラジミル・シューバ/タス通信

右上 完成した新たな石棺が彫像の後ろに見える。2018年。クリエイティブ・コモンズ提供

右中 不運に見舞われたチェルノブイリ原発4号機建屋施設。2005年撮影。撮影：ペトル・パブリチェク（IAEA） クリエイティブ・コモンズ提供

右下 事故の後、汚染された故郷の村を離れる住民 撮影：ウラジミル・シューバ/タス通信

29. 原発事故—福島

2011年3月11日に発生した東日本大震災により、福島第1原子力発電所の事故は、スリーマイル島、チェルノブイリ事故を超える大事故となりました。4基の原発のうち、3基が水素爆発を起こし、大量の放射性物質を大気中に放出し、放射能被害を広範囲にもたらしました。

10年過ぎた現在も、35,000人が避難生活を余儀なくされています。溶け落ちた核燃料を冷却することにより、今も1日140トンの汚染水が発生しています。この汚染水は複雑な濾過工程を経て処理されていますが、放射性物質のトリチウムが水の中に残っています。敷地内には、この「処理水」を貯める大型タンクが増え続けています。

- 写真 上 水素爆発の後、建屋が粉々になった3号機 2011.3.31
中 避難指示区域で行方不明者を捜索する防護服の警察官 2011.4.7
下 客を乗せ、帰還困難区域の富岡町の桜並木を徐行して通るバス 2019.4.6
3枚とも毎日新聞社提供

IV 国連と被爆者のあゆみ

30. 国連発足

1945年8月6日広島、9日長崎に米軍が人類初の原子爆弾を投下しました。同年10月24日国際連合（国連）が発足、翌年46年1月10日に開会した第1回国連総会は、1月24日、第1号決議「原子力委員会の設立を求める決議」を採択し、米国も賛成しました。核兵器のない世界に進行するかにかに見えましたが、米国と当時のソビエト連邦をそれぞれ中心とする軍事同盟が誕生。大量の核兵器を持つことで相手に攻撃をさせないという「核抑止力」論にもとづいて核軍拡を進め、核保有国が増えました。

- 写真 上 日本国憲法は1946年11月に公布され、第9条で、国際紛争を解決する手段として、戦争を放棄している。9条は、スペイン語に翻訳され、カナリア諸島テルデ市の広島・長崎広場に展示されています。撮影：伊藤千尋
下 第1回国連総会 1946年1月10日、ロンドン。撮影：マルセル・ボロメイ 国連提供

31. 核兵器の禁止と廃絶を求めて

第二次世界大戦終了から5年後の1950年にストックホルム・アピール、10年後の1955年にラッセル・アインシュタイン宣言が発表されました。アピールは「核兵器の絶対禁止、厳重な国際管理の確立」、宣言は「核兵器の廃絶と戦争廃止」を訴え、今日までの世界市民の運動、科学者の平和運動に大きな影響を及ぼしました。核兵器の禁止と廃絶を求める国際的運動の発端でした。

- 写真 上 アルバート・アインシュタイン
中 ラッセル・アインシュタイン宣言を読み上げるバートランド・ラッセル 1955.7.9
撮影：カール・サットン
下 スtockホルム・アピールの署名活動。1951年7月東京・豊洲にて。連合通信提供

32. ビキニ水爆実験から原水爆禁止運動へ

原爆投下の9年後の1954年、太平洋上のビキニ環礁でアメリカが実施した水爆実験により放射性降下物の「死の灰」が約160キロ離れた海域で操業していたマグロ漁船第五福竜丸にも降り注ぎました。乗組員の放射線被害が詳しく報道されるなか、無線長の久保山愛吉さんが9月に亡くなりました。この事件により原水爆、放射能に対する国民の関心は急激に高まり、各地で起こった原水爆禁止を求める署名活動は、瞬く間に全国に広がり、3000万以上の署名が集まりました。

- 写真 左上 原水爆禁止を求める署名活動 1954.4月 東京・上野 日本原水協提供
右上 ビキニ水爆実験の雲 1954.3.1 撮影：アメリカ空軍

左下 放射線障害と診断された福竜丸の乗組員たち 1954.4月 毎日新聞社提供
右下 廃船になった福竜丸 1970年夢の島 撮影：森下一徹

33. 日本被団協結成

“自分たちと同じ苦しみを地球上の誰にも経験させたくない”

署名が大きな力になって、原水爆禁止世界大会へ、そして原爆投下から11年目の1956年、日本被団協の結成となった。

設立時の『世界への挨拶』

「…私たちは自らを救うと共に、私たちの体験をとおして人類の危機を救おうという決意」を誓い、65年間その実現を求め、一日も休むことなく歩んできました。

写真 2枚とも日本被団協結成大会 1956.8.10長崎 連合通信提供

34. 核兵器拡散の阻止

1960年代、核兵器を製造する能力を持つ国が増えたことで、核兵器の拡散が大きな問題となりました。核兵器不拡散条約(NPT)が国連の会議で交渉され、1968年に署名が始まりました。条約は、1970年に発効し、法的拘束力を持つようになりました。

1967年以前に核兵器を製造した国(米国、旧ソ連(現ロシア)、英国、フランス、中国)は核兵器国に分類され、その他の加盟国は核兵器を製造しないことを約束して原子力の平和利用を享受することができる、としている。

2020年1月現在、191カ国が条約の順守に合意している。

写真 上 NPT再検討会議準備委員会第1回会合(1974年4月1日、スイス・ジュネーブ) 国連提供

下 1995年5月、無期限延長が決まった再検討・延長会議。第6条は、核軍拡競争に終止符を打ち、核兵器を廃絶し、最終的には国際的な完全な軍縮を達成することを約束している。国連提供

35. 1977 被爆者問題国際シンポジウム

1945年に投下された2発の原爆の影響をまとめた国際シンポジウムが、1977年、国連NGO主催で東京、広島、長崎で開かれた。日米ともに決定的なデータが公式に発表されていないことを指摘する反核運動家の要望に応えたものである。

会議では、1945年末までに広島で14万人、長崎で7万人が原爆により亡くなったとする調査の結果が発表された。

フィリップ・ジョン・ノエル＝ベーカー氏は、「生か忘却か」と題したシンポジウムの閉会の辞で、「世界のヒバクシャよ、団結せよ。輝かしい未来の人民、それは私たちだ。」と述べた。このとき、「ヒバクシャ」は国際的なことばになった。

写真 上 シンポジウムの開会を宣言するアーサー・ブース議長

下 ノエル＝ベーカー卿(1959年ノーベル平和賞受賞) 撮影：森下一徹

36. 国連軍縮特別総会

軍拡競争が続く中、国連総会は1978年、軍縮に関する初の特別総会を開催した。

世界各国の平和活動家の代表団がニューヨークの街を行進する異例のイベントだった。その中には、核兵器廃絶を求める日本の活動家500人も含まれていた。

国連では1982年と1988年にさらに2回の軍縮特別総会が開かれた。

写真 上 「ノーモア・ヒバクシャ、ノーモア・ウォー」第2回軍縮特別総会で訴える山

口仙二氏。UPI・共同提供

下 第2回軍縮特別総会の会期中に開かれたマンハッタン42番街でのデモ
1982.6.12 撮影：尾辻弥寿雄

37. 被爆者、欧州で訴える

1980年代、アメリカとソ連が中距離ミサイルをヨーロッパに配備しようとして核戦争の危機が高まり、ヨーロッパで反対運動が盛り上がりました。

イギリス、ドイツ、フランス、オランダなどで30万人から50万人の集会がたびたび開かれました。集会への参加要請を受けて、たくさんの被爆者がヨーロッパに向かいました。

82年8月には遊説団が東・西ドイツ（当時）、イタリア、オランダ、フランスを歴訪、そのうち4人の代表がバチカンを訪れ、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世に謁見し、核兵器廃絶への尽力を要請しました。

写真 左上 ローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世に核兵器廃絶を要請 1982.8.25

右上 ヨーロッパ遊説団 ドイツ・ブーヘンワルト強制収容所解放記念塔の前で
1982.8

左下 フランス遊説 肥田舜太郎医師、モンプリエ市技術専門学校で講演 1983.10

右下 ドイツのボンで開かれた50万人の集会で連帯のスピーチをする小西悟さん
1983.10.20

V 核兵器も戦争もない世界へ向かって

38. 核弾頭数

冷戦が終結したにもかかわらず、依然として、世界中に核兵器による脅威が存在しています。これら大量の核兵器の威力を合計すると、地球上に生きるすべての生物を何回も殺すに十分なのです。

世界の核実験数（原子力科学者会報 1998年11/12月号）、核兵器数（2022年SIPRI年鑑から）

アメリカ 5,428（3ヶ所、1030回） ロシア 5,977（2ヶ所、715回） フランス 290

（2ヶ所、210回） イギリス 225（4ヶ所、45回） 中国 350（1ヶ所、45回）

インド 160（1ヶ所、6回） パキスタン 165（1ヶ所、6回） イスラエル 90（？、？）

北朝鮮 20（1ヶ所、7回）

背景写真 1956年5月20日レッドウィング作戦

「20世紀の記録 カラー写真で見る太平洋戦争秘録」原 勝洋

KK ベストセラーズ

39. 世界法廷運動

市民運動として始まった世界法廷運動が国際的な運動に発展し、1993年の国連総会、国際保健機関（WHO）の決議によって国際司法裁判所（ICJ）に勧告的意見を求める決議案が可決された。

日本の世界法廷運動では300万余人の署名が国際司法裁判所に提出された。

広島、長崎両市長は、核兵器は違法だとの意見陳述を行った。

1996年7月8日ICJは勧告的意見を発表し、国連総会に提出した。意見では「核兵器の使用は一般的にみて武力戦争法、とりわけ国際人道法の原則とルールに反する」としながらも「国家の存続が危ぶまれるような極端な状況での自衛のための使用または威嚇が合法的であるか

違法かどうかについての結論を下すことはできない」とした。

写真：上 ICJの法廷 東友会提供

下 世界法廷運動代表団。1995年10月オランダ・ハーグの平和宮（ICJが置かれている）の前で。東友会提供

40. ハーグ市民会議・ミレニアムフォーラム

1899年に開催された「第1回平和国際会議」100周年を記念し、ハーグ平和アピール1999・国際市民平和会議が1999年5月世界の100か国、790の団体と1万人に及ぶ個人が参加して、オランダのハーグで開催された。

日本代表は「つたえよう ヒロシマ・ナガサキ」代表団として参加し、「原爆と人間展」の展示、証言。「世界のヒバクシャ」集会、ジャパンデーの中に78名の被爆者が参加。会議では、「21世の紀平和と正義のための宣言」が採択された。

1年後、新しい世紀を迎えるに当たり、国連、市民社会、NGOが協力して取り組む共同課題を議論し、平和、安全保障、軍縮など5項目の行動課題を含む宣言を採択した。

写真：上 ブリュッセルのNATO本部への行進に参加する被爆者代表を見送る。1999年5月ハーグ。

中 ハーグ平和アピール国際会議、1999年5月。日本反核法律家協会提供

下 国連ミレニアムフォーラム、2000年5月国連本部。

41. 核兵器の人的側面に関する共同声明から国際会議へ

2012年5月NPT準備委員会でスイスなど16か国が共同声明を提案した。『いかなる状況下においても、核兵器が2度と使用されないことが最も重要であり、そのための唯一の保証は、核兵器の廃絶である』以後、その賛成国は回を重ねるごとに増えた。

その間、核兵器の人的側面に関する国際会議が精力的に開催された。2013年3月ノルウェー（オスロ）参加127か国、2014年2月メキシコ（ナヤリット）146か国、2014年12月オーストリア（ウィーン）158か国。どの共同声明、国際会議のまとめも市民社会の役割が決定的だとした。

バチカン国際会議 2017年11月、バチカンで初めての軍縮会議が開催され、被爆者も招待された。フランシスコ教皇：「核兵器は使用と威嚇だけでなく、その所有だけでも強く非難されるべきである」

写真：上 オスロ会議。ピースボート提供

中 ナヤリットの会議で行なわれた「ヒバクシャセッション」で発言する被爆者代表、2014年2月13日。

下 バチカンの会議で発言を終えた被爆者の和田征子さん、2017年11月。しんぶん赤旗提供

42. 非核兵器地帯

トラテロルコ条約（1967年 ラテン・アメリカおよびカリブ地域における核兵器禁止条約） ラロトンガ条約（1985年 南太平洋非核地帯条約） バンコク条約（1995年 東南アジア非核兵器地帯条約） ペリンダバ条約（1996年 アフリカ非核兵器地帯条約） 中央アジア非核兵器地帯条約（2006年） モンゴル国非核地帯地位（1992年） 南極条約（1959年） 宇宙空間条約（1967年） 海洋だな条約（1971年）

43. ヒバクシャ国際署名

2016年4月、ヒロシマ・ナガサキの被爆者たちが訴える「ヒバクシャ国際署名」がはじまりました。2020年までに、世界中で署名を集めることを目標として、毎年、国連総会などで、提出、2020年12月31日までに累計13,702,345筆の署名を国連事務総長宛てに提出することができました。

写真：左上 2016年4月、渋谷駅前の署名行動

右上 キャンペーンリーダーとして活動する林田光弘さん

左下 2019年5月1日、2020年NPT再検討会議にむけた第3回準備委員会で、サイド議長へ署名提出

右下 長崎の街頭署名

44. 核兵器禁止条約

2015年5月のNPT再検討会議最終日、米英加が拒否したためNPTの議論最終文書は採択されなかった。翌年国連で、議論を重ね、2017年には、3月と6、7月に核兵器禁止条約案を議論し、最終日の7月7日、前文と20条の核兵器禁止条約を122カ国の賛成で採択した。

写真：上 条約交渉会議議長に、集まった署名を提出する被爆者代表、2017年6月。

下 核兵器禁止条約が採択されたことを喜ぶ被爆者の藤森俊希さん（被爆当時1歳）、サーロー節子（13歳）さん。

45. 高校生の取り組み

★高校生平和大使と1万人署名

高校生平和大使は1998年から毎年国連を訪問し、核兵器廃絶と平和な世界の実現を訴えてきました。2001年、平和大使募集をきっかけに集まった高校生たちは、核兵器廃絶をめざす活動を自分たちの力でと考え、「核兵器の廃絶と世界の平和の実現を求める高校生1万人署名」活動署名を立ち上げました。長崎で始まりましたが、今では国内各地に拠点があり、世界にも広がっています。

★高校生が描く「原爆の絵」

被爆者と対話を繰り返し、被爆者が体験した「原爆」を絵画として表現する活動は、広島市立基町高校の生徒たちによって2007年から取り組まれてきました。高校生は、被爆者の体験を心で受け止め、体験したような気持ちを味わいながら絵を完成させます。絵は被爆の実相を伝える資料となり、被爆者と高校生のつながりは、人から人への継承の大切な場となっています。

写真：上 広島平和記念公園で核兵器廃絶を求める署名を集める高校生たち 高校生平和大使実行委員会提供

下 2枚 2019年までに、延べ112人の生徒が被爆者の証言をもとに137枚の絵を描きました。生徒たちは半年以上にわたり、作品制作を通じて、被爆者の体験を自らの体験としてとらえていきました。広島市立基町高校提供

46. 大学生の取り組み

★武蔵大学の学生たちは、日本被団協の資料をもとに、42分間の映像作品「声が世界を動かした」を制作しました。学生の一人はこの取り組みを通じて、「正々堂々と厚生省前に座り込み、正義のためにたたかう大人の姿に敬服した。不正なことを正さなくてはという強い意志、継続的に行うことの凄みを感じた」と話しました。

★昭和女子大学では、戦後史を後世に伝えるプロジェクトに取り組み、現在整理されただけでも6000点を超える日本被団協の運動資料の中から、テーマに沿った資料を読み込み、被爆者に会っ

て話を聞き、研究を進めています。学生の一人は、「被爆者の原爆に対する怒りは、はじめは個人的だったと思うが、それをまとめあげていったのが日本被団協の運動だったのではないだろうか」と考察しています。

写真：上 広島被爆者の濱住治郎さん（中央）を囲む「被爆者の声を未来につなぐ会議」に参加した学生たち。2018年12月15日武蔵大学にて。

中 長崎被爆者の木戸季市さんの証言を聴く昭和女子大学の学生たち、2019年3月。

下 日本被団協の元事務局員の栗原淑江さんから被爆者運動について聞く武蔵大学の学生。2018年10月。

47. 各国の青年たちの取り組み

2010年NPT再検討会議以降、核兵器廃絶運動は活発になっていった。とくにヨーロッパで青年たちの活躍が広がった。

写真：左上 国際会議「核兵器の人的影響」に先立って開かれたICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）市民社会フォーラムに、被爆者代表の田中熙巳さんとともに参加する若者たち、2013年3月、ノルウェー・オスロで。ピースポート提供

右上 ウィーン大学で長崎被爆者の田中さんの証言を聴く学生たち、2012年5月。

右中 ノルウェーのウトヤ島でキャンプに参加する青年たちに証言する広島被爆者の藤森俊希さん、2015年8月。撮影：鎧麻樹

右下 平和のための灯籠流し、2015年8月オスロにて。撮影：鎧麻樹

48. ヒバクシャからのメッセージ

「平均年齢80歳を超えた被爆者は、後世の人びとが生き地獄を体験しないように、生きている間に何としても核兵器のない世界を実現したいと切望しています。

あなたとあなたの家族、すべての人びとを絶対に被爆者にはなりません。あなたの署名が、核兵器廃絶を求める何億という世界の世論となって、国際政治を動かし、命輝く青い地球を未来に残すと確信します。あなたの署名を心から訴えます」

ヒバクシャ国際署名のよびかけから

絵：いわさきちひろ「ききょうと子どもたち」